

**男に戻りたいTSハンターは、
相棒剣士の深すぎる百合愛から
一生逃げられない**



プロローグ

第一章 引けぬ剛弓、揺らぐ輪郭

第二章 水上都市ヴェネ・アスール

第三章 孤独の叫び、夜明けの沈黙

第四章 器を捨て、魂を抱く

第五章 一生を賭けた取引

エピローグ

プロローグ

夕暮れが、森の輪郭を紫紺の帳で塗り潰していく。

小枝が爆ぜる乾いた音とともに、薪から立ち上る煙が夜風に巻かれて薄く揺れていた。

鉄串に刺した野鶏の皮が、火の熱を吸ってパチリと小さく脂を弾く。

黄金色の皮から透き通った脂が滴り落ちて灰を燻すたび、香草の清涼な香りと香ばしい肉の匂いが冷え切った空気をじんわりと温める。

「……いい匂いだな。鳥の血抜きも完璧だ。相変わらず、レナリアの手際の良さには頭が下がる」

焚き火の向こう側。

丸太に腰を下ろしたアルマが、瞳を熱っぽく細めながら鼻先をひくつか

せていた。身の丈ほどもある大剣を傍らに立てかけ、長身を前に乗り出して串焼きを見つめる姿は大型の猟犬そのものだ。

俺はナイフの切っ先で肉の弾力を確かめ、岩塩を親指と人差し指で擦り合わせながら、パリリと高い位置から振り落とした。

「当たり前だ。お前みたいに外側だけ消し炭にして、中は血の滴る生焼けっていう野蛮な餌を食わされる身にもなってみろってんだ」

「む……あれはだな、外皮の極限の香ばしさを追求した結果なのだが」

「それを世間じゃただの丸焦げって呼ぶんだよ、この筋肉バカ。胃袋の頑丈さだけでサバイバルすんじゃねえ」

呆れ混じりに吐き捨てると、アルマは「手厳しいな」と苦笑を零した。だが、その表情には微塵の不快感もなく、むしろ俺の憎まれ口そのものを楽しんでる節すらある。

骨格を組み替えられ、腕力も体軀も削ぎ落とされたこの身体になってからというもの、かつての大弓を引き絞る剛力は失われた。だが、細かな肉

の筋を断ち、刃先の角度ひとつで素材を活かすような手先の感覚だけは、皮肉にも男だった頃よりも繊細に冴え渡っている気がする。

「ふふっ。しかし、なんだかんだ言いながら楽しそうに料理するんだな」「そうか？ まあそうだな。料理は嫌いじゃない。俺は昔から、こういう細かいことをちまちまやるのが性に合っているんだろうな」

「手先も器用だからな、お前は」

「不器用なハンターがどこにいる。罠ひとつ満足に仕掛けられねえ奴から真っ先に魔物の胃袋行きだ。まあ確かに腕力任せで雑な奴もいたが、揃いも揃ってパツとしない三流ばかりだったよ」

かつて背中を預け、そして最後には俺を奈落へ突き落としたあのクズどもの顔が脳裏を一瞬かすめる。

だが、今宵の澄んだ空気は、そんな苦い澱みを驚くほどあっさりと吹き散らしていった。

肉を裏返し、皮目に絶妙な焼き色がついているのを確認する。

ふと視線を上げると、薪の爆ぜる赤い光を浴びたアルマの端正な美貌が、じっとこちらを見つめていた。飾り気のない、どこまでも澄み切った黄金の瞳。

俺は小さく鼻を鳴らし、火の粉から目を逸らすようにして、ぼそりと本音を零した。

「それに……俺の作った飯を、旨そうに食ってくれる奴がいたら、次も旨いものを作ってやりたいって気になるからな」

一瞬の静寂。

パチリ、と薪が小さく爆ぜる。アルマはきょとんと瞳を丸く見開いた。そして、言葉の意味を咀嚼した瞬間、その顔立ちが見るうちに輝きを帯び、まるで極上の獲物を見つけた動物のように光を宿した。

「レナリア……！ それはもしかして、私のことか？ そうだよな!？」

「二度も言わせんな。お前のその遠慮のない喰いっぷりは、見ていて気持ちがいい……それだけだ」

「ああ、なんて可愛いことを言ってくれるんだ！　今すぐ抱きしめて頼ずりしてやろう！」

「寄るな！　料理中に無駄にデカイ図体で突進してくるんじゃねえ！　肉が灰に落ちたら本気で恨むぞ！」

立ち上がりかけたアルマの額へ、俺は熱くなっていない串の尻をピタリと突きつけて制動をかけた。

「……わかった、お預けだな」

あからさまに眉を八の字に曲げ、大型犬のようにしゅんと丸太へ引き下がるアルマ。

かつては一国の近衛騎士団すら震え上がらせる規格外の怪物が、飯の焦げ目を気にして大人しく膝を揃えている。その落差があまりにも間抜けで、俺の口元から思わずふっと小さな笑みがこぼれ落ちていた。

男としての誇りも、失われた筋力への苛立ちも。

この脳天気で規格外な相棒と火を囲んでいる時間だけは、どこか遠い世

界の出来事のように心地よく熱の奥へ溶けていくようだった。

焚火の周囲を小石で囲い、遠火の熱がじつくりと肉の芯まで通るよう調整する。

立ち上る脂の甘やかな香りが夜気の冷たさに溶けていくのを見届けて、俺はふうと息を吐き出した。

「よし……これで、あとは十五分ぐらいだな。触らずにじつくり待てば、皮はパリッと、中は肉汁を閉じ込めた極上が出来上がる」

「十五分か。実に待ち遠しいな」

火の番から離れ、少し腰を伸ばそうと背を向けた、その時だった。

背後から音もなくすり寄ってきた長い影が、俺の華奢な肩口を両側からすっぽりと覆い尽くした。

「疲れただろう、レナリア。肩を揉んでやろう」

「お、おい……ああ、ありがとよ。だが別にそこまで——」

断る間もなく、アルマの逞しくもしなやかな指先が、首筋から肩甲骨の

キワへと食い込んできた。

剣ダコのある硬い掌が、強張りかけた筋を的確に捉えてぐっと圧をかける。男だった頃の分厚い僧帽筋ならともかく、今のこの薄く削ぎ落とされた小娘の身体は、骨格そのものが華奢すぎて刺激がダイレクトに芯へと響くのだ。

「っ……ん、あ……」

思わず喉の奥から零れ落ちたのは、自分でも耳を疑うほど艶めかしく上ずった吐息だった。慌てて唇を噛み締めたが、もう遅い。

「気持ちいいか？ レナ」

耳元に落ちてきたのは、低く穏やかで、けれどどこか熱を孕んだ声。

無防備な嬌声を漏らしてしまった気恥ずかしさを誤魔化すように、俺は細い首筋を強張らせながら、わざと気怠げに鼻を鳴らしてみせた。

「ああ……もう少し弱くてもいいな。小娘の身体になっても、しっかり肩は凝るんだからバカバカしいよな……って、おい、アルマ……？」

揉みほぐす指先のリズムが、ふと変質した。

力強い指圧から、薄い皮膚の表面をじつとりと撫で擦るような、熱を孕んだ粘りつくタッチへ。

鎖骨の窪みをなぞり、未発達な胸元のきわへとじわじわと這い降りてくる指先の感触に、背筋を甘い痺れが駆け抜ける。

トクン、トクンと急激に脈打つ鼓動が、何やら嫌な予感を告げている。

「……アルマ？」

怪しんで身を引こうとした瞬間には、すべてが手遅れだった。

ダボついたシャツの緩んだ襟元から、躊躇なく、熱い掌が滑り込んできたのだ。

「なっ……!?!」

抵抗の言葉を紡ぐ暇すら与えられず、薄い肌着の布地ごと、俺の平坦な胸元にある小さな突起が、親指と人差し指の腹でコリッと逃げ場なく摘み上げられた。

「ふにやつ……!? ひ、やう……つ、んんッ!?」

不意打ちの電撃のような痺れに、猫を踏んづけたような情けない悲鳴が口から零れ落ちてしまう。思わずきゅつとすくめた肩と、勝手に跳ね上がった下腹部の熱さに、自分でも顔から火が出るほど甘い声を漏らしたことを思い知らされていた。

脳天を突き抜ける電撃的な痺れ。小娘の身体に変えられて以来、異常なまでに神経が過密化したそこを転がされるたび、男の理性が奥歯の隙間から情けなく零れ落ちそうになる。

「な、何すんだこの筋肉バカ……ッ! 料理が焦げるだろ、手を離せ!」
涙目で振り返り、低い声を絞り出そうとする。だが、アルマの瞳は獲物を捕らえた獣のように爛々と据わり、至極涼やかな美声でとんでもない宣告を落としてきた。

「焦げはしないさ。十五分あるのだろう? それまでには終わらせる」
「はあッ!? どんな計算だ、やめろ——」

「お礼だ。美味しい飯を丹精込めて作ってくれるお前を、私も心ゆくまで氣持ちよくさせてやりたい」

「恩を仇で返すなド変態が……っ、ひゃうッ、あぁッ!？」

抗議の怒号は、無慈悲にねじり上げられた突起の激痛にも似た甘い痺れによって、あられもない悲鳴へとすり替えられた。

アルマは背後から俺の細い腰を片腕で万力のように抱きすくめ、完全に逃げ場を塞ぎにかかる。

耳元へと吹きかけられる、熱く湿った吐息。その微かな呼気の震えすら、今の過敏になりすぎた神経には毒となつて背筋を駆け上がる。

「ほら……文句を言う唇とは裏腹に、胸の先端はこんなにもカチカチに尖つて、私の指に吸い付いてくるぞ。十五分も保つか怪しいな、レナ」

「だ、誰が……っ！ お前の指の皮が、硬くて痛えだけだ……っ、んくうッ！」

「強がりと言うな。痛いだけで、こんなに蜜の匂いを立ち上らせるものか」

アルマのもう片方の手が、抵抗する俺の太ももを割り込み、ズボンの合
わせ目を押し広げて、熱を孕んだ下着の薄布の上へと無骨に沈み込んだ。

「しまっ……そこは……ッ！」

「ほう……すでにこんなに熱く湿って、重たくなっている……料理の火加
減を気にしている暇があるのか？」

「ふざけ、んな……っ！ 全部、お前が急に……あ、うぐッ!？」

薄い布地を隔てているにもかかわらず、指先が狭小な窪みを正確になぞ
り、芯をグッと押し潰すように圧迫してくる。

ジュッ、と遠くで肉の脂が熾火に落ちる音がした。

香ばしい匂いと、肉がじつくりと火に炙られるパチパチという爆ぜる音。
そのすぐ傍らで、俺自身の身体が、まるで同じように逃げ場のない熱で炙
り立てられていく。

十五分。あの鶏肉が焼き上がるまでの、限定された時間。

そのリミットが、かえって逃げ場のない焦らしとなって神経を極限まで

尖らせる。早く終わらせてくれという恐怖と、早く達して楽になりたいという肉体の浅ましい本能が、頭の芯でぐちゃぐちゃに混ざり合っていく。

「声……っ、耳元で、喋るな……っ！ この、脳筋が……あんっ！」

「口では減らず口ばかり叩くの、身体はこんなにも素直で愛らしい……レナ、お前のこういう啼き声、私は本当に好きだぞ」

「誰が……啼いてるだ……っ！ ふざけ、んな……あぁッ、ひゃうッ!？」

アルマの指先が布地をずらし、直接、熱狂に震える秘所の最奥へと滑り込んだ。肉が爆ぜる音に混ざり、夜の静寂にジュプ、と不躰で淫らな水音が小さく跳ねる。

「ひ……っ！ ま、待て……力、抜け……っ、あ、あぁぁッ！」

「待てと言われてもな。お前のここ、私の指を離したくないとばかりに、きゅうきゅうと締め付けてくるぞ。ほら、ここを少し擦ると、腰が勝手に浮く」

悪気など一片もない、至極淡々とした観察眼。剣の太刀筋を確かめるか

のような無骨で純粋な物言いが、男としてのプライドを粉々にすり潰していく。

抗いたい。こんな小娘の肉体の衝動に屈したくない。

かつて数多の修羅場を越えてきた元・Sランクハンターの誇りが警鐘を鳴らしているのに、この身体は甘美な歓喜に震えて熱い飛沫を滲ませてしまう。

「ほら、力をもっと抜け。そんなに奥を窄められたら、私の指が抜けなくなってしまうぞ」

「う、うるせえ……っ！ 抜けなくなつて……困るのは……あッ、んんうッ！」

「素直じゃないな……なら、もっと素直になれる体勢にしてやろう」
アルマの逞しい腕が、抗う間もなく俺の膝裏を強引に抱え上げた。

同時に、器用な指先がショートパンツの留め具を弾き、薄手の肌着ごと一気に足首まで引き下ろしていく。

「な……っ!? おい、脱がすな……っ!」

背中をアルマの胸当てに預けさせられたまま、俺の両脚は、焚き火の明かりに向けて左右へと大きく割り開かれた。

露わになった小娘のつるんとした秘所と、昂り始めた小さなクリトリスが夜風に晒される。薪の爆ぜる橙色の光が、無防備に晒し出された最も恥ずかしい割れ目を隅々まで照らし出していた。

「良い眺めだな。これなら、お前がどれだけ熱く乱れているか、火の光でよく見える」

「見せるな、バカ……ッ! こんな格好……っ!」

「恥ずかしがる必要などないぞ? ほら、風に当たっただけでこんなにも震えて、すでに蜜を滲ませているぞ」

「滲んでねえよ……っ!」

男の意地で必死に足を閉じようとするが、アルマの剛腕に阻まれてビクともしない。

赤面で沸騰する俺をあざ笑うかのように、熱を帯びた指先が、剥き出しの突起を容赦なく捉えた。

「見せるな、バカ……ッ！ あ、ああッ!!」

露わになった芯を、アルマの指の腹で円を描くようにぐにぐにと押し潰された。

同時に、ぬめる隙間を割って胎内深くに沈められた指が、過敏な天井を跳ね上げるように激しく蠢き始める。情けない嬌声が夜の静寂へと散らばっていった。

視界の端で、遠火に炙られた鶏肉の皮が、飴色に艶めいて脂の泡を立てているのが見える。香ばしい匂いと、俺自身の秘所から立ち上る甘ったるい蒸気の匂いが混ざり合い、頭の芯が白く焼き切れていく。

（くそっ……！ 飯が……焼き上がる前に……こんな……っ！）

男としての自尊心が、最後の防壁を必死に支えようとする。

だが、内と外から同時に決り潰される逃げ場のない刺激の奔流に、俺の

身体はガタガタと痙攣し、自ら腰を突き出して指を食るように、大きく脚を開いて跳ねていた。

「ほら、レナリア……もうすぐ、美味しそうに焼けるぞ」

「あ……っ、だめ……っ！　もう、頭が……っ、アルマあッ!!」
耳元に落ちた低く甘い囁きが、最後の一線が無残に叩き割った。

限界だった。

張り詰めていた弦が弾け飛ぶように、喉からあられない絶叫が夜気へと迸る。

「ひゃああああーッッ!!　んああッ、あ、ああああーッッ!!」

背中を激しく弓なりに反らし、全身を小刻みに震わせながら、俺はアルマの腕の中で強烈な絶頂の波へと呑み込まれた。

熱い飛沫が指を伝って落ち、ピクピクと跳ねる内壁が、逃がすまいとアルマの指を狂おしく締め上げる。

立ち上る焚き火の煙の向こう、夜空に瞬く星々が、涙でぐしやぐしやに

滲んで白く溶けていく。

荒い呼吸だけが、肉の焼ける静かなパチパチという音の中に、どこまでも情けなく響いていた。

パチッ、と静かに爆ぜた熾火の音が、白く霞んでいた俺の意識を無理やり現世へと引き戻した。荒い息が喉の奥で小刻みに震え、開いたままの太ももは力が入らず、痙攣の余韻を小刻みに刻んでいる。

下腹部の奥底にはまだ鈍い熱が澱のように沈殿し、肌着を伝う生温かい湿り気が、自分がどれほど無様に果てたかを嫌というほど肌で分からせてくる。

「……ふう。八分ぐらいか。全然心配いらなかったな」

背後から掛けられたのは、恐ろしいほど平熱を保った涼やかな声だった。ずるりと体内から異物が抜かれ、微かな水音とともに解放された瞬間、下腹部がきゅんと切なく引き攣る。

アルマは躊躇いもなく手拭いの布を取り出すと、自身の指先にねっとり

と絡みついていた蜜の糸を、まるで見事な太刀筋を確かめた後の納刀のよう
に、丁寧な、丹念に拭い去った。

俺は乱れた前髪を汗ばんだ額から払い、震える手で地面を支えながら、
肩で息をついて睨みつけた。

「お前……っ、本当に……時間内に終わらせやがって……っ！」

「言っただろう、それまでには終わらせると。それに……」

アルマは布を畳み、至極真面目な琥珀色の瞳をこちらに向け、事も無げ
に言っただけだ。

「レナリアの敏感な身体なら、火が通り過ぎて肉が焦げる心配などハナか
らなかったからな。少し触れただけで、驚くほど素直に啼いて跳ねてくれ
る」

「な……っ!?」

あまりにも堂々とした、悪びれもしない品定め。

その無神経極まりない言葉責めに、カッと耳の先まで一気に血が逆流し

た。小娘の喉を無理やり震わせて、ありったけの怒声を叩きつける。

「この……変態筋肉女が……！ お前、今日の飯は抜きだ!!」

「な、なんだと!? レナリア、それはあんまりだ!」

アルマは心底ショックを受けたように両手を広げ、捨てられた大型犬のように眉を八の字に下げて詰め寄ってきた。

「美味そうに食べる私の姿を見るのが気持ちいいと、さっき言ったばかりではないか! あの見事な狐色に焼けた鶏肉を前にして、お預けなど拷問に等しいぞ!」

「うるせえ! 人の身体を散々オモチャにした奴に、食わせる慈悲なんてあるか! 一人で草でも齧ってろ!」

「そんな……! レナリア、頼む! 私の分を一口、いや、骨の周りだけでもいいから……!」

長身を折り曲げ、涙目で本気で拝み倒してくる最強の女剣士。

先ほどまで俺を完璧に手玉に取って啼かせていた冷徹な色気など微塵

もない、あまりにも情けないその落差に、俺は深い深いため息をつきながら、結局は串焼きの半分を皿へ叩きつけるように取り分けてやったのだった。

「……食べ。焦がさずに仕上げた俺の腕前を、骨の髄まで噛み締めて味わえ」

「ああ……！　ありがとう、レナリア！　やはりお前は最高の相棒だ！」
目を輝かせて肉に食らいつくアルマを横目に、俺は自分の取り分をちびちびと口に運んだ。

肉汁が口いっぱいに広がり、皮の香ばしさと岩塩の塩気が絶妙に調和している。完璧な仕上がりだ。

……完璧すぎて、余計に腹が立ったが。

それから一刻（いっこく）ほど経ち、満腹になったアルマは焚き火の脇に敷いた分厚い毛布へ潜り込み、あっと言う間にすやすやと深い寝息を立

て始めていた。

無防備に晒された銀髪の寝顔。

昼間の強者としての風格も、夜に見せる飢えた獣のような艶めかしさも綺麗さっぱり消え去り、そこにあるのはただの無邪気な女の顔だ。

「……呆れた奴だ」

小さく毒づき、俺は自分の毛布をそっと抜け出した。

夜気は冷たく、火照りが残る肌をひんやりと撫でていく。

小枝を踏まないよう、足音を完全に殺して歩を進める。

向かった先は、大木の根元。

そこに立てかけられていた、黒塗りの頼りない細身の獲物——『短弓』の前だった。

篝火の朱い光が、静まり返った夜の帳の中で淡くその弓の輪郭を浮かび上がらせていた。

俺は無言のまま、冷えた木肌へとそっと手を伸ばした。

触れた瞬間に手のひらへ伝わる、頼りない軽さ。

かつて大陸の東部戦線を単独で支配し、巨大な魔獣の眉間を千歩先から撃ち抜いていた、あの剛弓のずしりとした重力は、そこにはない。

細い指先を、ピンと張られた弦へと滑らせる。

爪を立て、硬い弦を指の腹で噛ませた瞬間、皮膚の奥で記憶が軋むような鈍い痛みが走った。

白く、細く、小枝のように華奢な指先。

女に変えられてからというもの、この身体は引き絞るためではなく、他の者の手ほどきに震え、甘い蜜を滴らせて喘ぐための肉体としてすっかり馴染んでしまっていた。

(……あいつとの旅は、悪くねえ)

息を潜めながら、心の中で小さく呟く。

胃袋を掴み、軽口を叩き合い、背中を預け合って生き延びる日常。

男だった頃の孤高で張り詰めた日々には決して存在しなかった、甘美で、

どこか泥のように心地よい居場所が、確かにここにはあった。

だ。

弦をわずかに引き絞ろうとした瞬間、右腕の筋肉が微かに痙攣し、指先がピクリと力を失って弦を滑り落とした。

ビーン、と小さく、情けない音を立てて震える弦。

(……ふざけんなよ)

奥歯を強く噛み締める。

——女の身体でも、知略と工夫があれば生き残れる。

——今さら男に戻ったところで、また面倒な利権やしがらみに巻き込まれるだけだ。

これまで自分に言い聞かせてきた数々の理屈が、頭の芯で音を立ててひ

び割れていく。

嘘だ。

全部、ただの負け惜しみだ。

割り切ったふりをしていただけの、惨めな自己欺瞞。

本当は、あの剛弓をもう一度引き絞りたい。圧倒的な間合いを支配し、己の力一つで修羅場をねじ伏せる、あの誇り高き男のハンターとして生きたい。

そのたぎるような渴望と未練は、どんなにアルマの指先で甘く蕩かされようと、身体の奥底で決して消えることのない冷たい火となって、ずっと燦り続けている。

もし、男に戻る手立てを見つけたら？

男の身体を取り戻し、以前のような屈強なハンターへと戻った時。

あのポンコツで、強くて、呆れるほど愛おしそうに俺を抱きしめてくる女剣士は、一体どんな顔をして俺を見るのだろうか。

男に戻れば、この温もりは消えるのか。

それとも、女の身体のまま、このまま甘やかに堕ちていくのが正しいのか。

答えの出ない宙ぶらりんな問いを夜風に晒しながら、俺はただ、冷たい短弓を胸元に抱きしめ、静かに夜の暗闇を見つめ続けるしかなかった。

第一章 引けぬ剛弓、揺らぐ輪郭

活気と欲望が混ざり合う大通りの喧騒は、かつて俺が闊歩していた幾多の街のそれと何ら変わりはなかった。

石畳を踏み鳴らす無数の足音。露店から漂う香草と安酒の匂い。そしてあちこちに掲げられた大小様々なギルドの旗印。

食料と消耗品の買い出し袋を小脇に抱え、歩き慣れたはずの雑踏をすり抜けていた俺の足が、不意に、吸い寄せられるように止まった。

視線の先にあったのは、老舗らしき武器屋の軒先。

分厚い檜の木の台座に鎮座していたのは見紛うはずもない、鋼と魔獣の角を幾重にも積層した大型の剛弓だった。

鈍い光を放つその弓幹は、かつて俺の右腕の一部として死線を共にした

名弓を想起させるに十分な威容を誇っていた。

気づけば、無意識に右手を伸ばしていた。指先が冷え切った鋼の表面に触れた瞬間、ずっしりと伝わってきたのは、背骨を軋ませるような圧倒的な質量。

(……重いな)

弦に、そっと指の腹を滑らせる。

かつて千回、万回と引き絞り、分厚い魔獣の腱を射抜いてきた記憶が指先の骨を疼かせた。

だが、わずかに弦を弾こうとした刹那、肘から肩にかけての細い筋が情けなく引き攣り、弓幹はミリ単位すらたわみすら見せない。

それどころか、支えきれない重量に引っ張られ、俺の身体がみつともなく前のめりに傾ぎかけた。

「おっと、危ねえよ、お嬢ちゃん」

奥からひよつこりと顔を出した頑固そうな店主が、苦笑混じりに太い手

で弓幹を支えた。

「触るのは構わねえが……そいつはお嬢ちゃんが扱える代物じゃねえよ。もっと背丈があつて、腕つぶしの太い男じゃないとな」

「……ああ。すまない。そうだな」

喉の奥から転がり出たのは、拍子抜けするほど高く頼りない声だった。「体格に合わねえ弓を無理に引いたって、獲物を仕留めるどころか自分の筋を痛めて終わりだ。お嬢ちゃんの背中にあるその細い短弓……そいつが今の身体には一番合ってるのさ。道具つてのは、身の丈に合わせるもんだ」

「……ああ。ありがとうよ。本当……その通りだ」

「何か入用の矢でもありや言ってくれ。俺は奥で矢羽根の手入れをしてるからな」

店主はそう言い残し、のれんの奥へと消えていった。

一人残された軒先で、俺は自分の右手をじっと見下ろす。

白く、透き通るように細い指先。弦を噛むための分厚いタコはすっかり

消え失せた、無力な生娘の指。

立ち去らなければならぬ。頭ではそう分かっているのに、足が石畳に縫い止められたように動かなかった。

「……まだ、未練があるのか？」

背後から落ちてきたのは、澄み切った、けれどどこまでも静かな低音だった。

振り返るまでもない。大剣を背負い、銀髪を潮風に揺らしたアルマがいつの間にか後ろに佇んでいた。

その瞳は、俺の強情な背中と台座に横たわる剛弓を、痛いほど静かに見透かしている。

「……そんなことはねえよ」

俺は努めて平然を装い、買い出し袋を持ち直して歩き出そうとした。

「また、その手を見つめているな」

淡々としたアルマの指摘に、足が止まる。

「なんのことだ？」

「気づいていないと思ったか？ ふとした時、お前はいつも自分の手を見ている」

「……別に、手相でも見てただけだ。女の身体になっちまったせいで、長生きできそうにねえ貧相な手相だなと思ってな」

皮肉混じりの軽口で煙に巻こうとした。

だが、アルマは一步間合いを詰めると、逃げ場を塞ぐように俺の目の前に立ちふさがった。長身の影が、すっぽりと俺の小さな身体を覆い尽くす。「誤魔化すな。昼間の街道でも、昨晚の篝火の前でもそうだ。お前はいつだって、自分の指先を見つめては、遠い目をしている」

逃げ道を完全に塞がれた。

大通りの喧騒が、ふいに遠く引いていくような錯覚を覚える。

アルマの声は普段の抜けたような能天気さなど微塵も残っておらず、刃物の切っ先のように冷徹で、哀しいほどに真摯だった。

「……レナリア。お前は、本当に今のままでいいのか？」

「あ？ 何言ってるんだ。裏切り者どもへの復讐は綺麗サッパリ終わったし、当面の金貨にも困らねえ。それに何より、お前っていう規格外の頑丈な壁……じゃなくて、大陸最強の前衛が隣にいるんだぞ？ これ以上の贅沢を望んだら、神罰が下っちゃうぜ」

早口でまくしたて、薄く笑ってみせる。

だが、アルマはその欺瞞に付き合う気など毛頭ないと言わんばかりに、ゆっくりと首を横に振った。

「誤魔化すな、レナリア……私は男に戻る方法を、探さなくてもいいのかと聞いているんだ」

心臓が、トクンと嫌な跳ね方をした。

全身の血が一瞬にして冷え切り、視界の端が微かに明滅する。

「……探してどうすんだよ」

俺は視線を逸らし、足元の石畳の継ぎ目を睨みつけながら、乾いた唇を

動かした。

「あの泉の変異が、元に戻せる保証なんてどこにもねえんだ。そもそも手掛かりなんて、この大陸中を這いずり回って探したところで、どこにあるかも分からねえだろ」

「探していないだけだろう」

静かな、だが一切の逃げ道を断つ一言だった。

すっと伸びてきたアルマの指先が、俺の顎を躊躇なく持ち上げる。

強引に視線を絡め取られ、冷徹なまでの美貌が至近距離で迫る。その瞳の奥に映る俺の顔は、驚くほど惨めで、怯えた娘そのものだった。

「お前は賢い。賢すぎるからこそ、『探して、戻れなかった時の絶望』を恐れて、最初から望まなかったことにしているだけだ……違うか？」

「っ……！」

胸の奥の、誰にも触れさせまいと分厚い氷で閉ざしていた核を、寸分の狂いもなく刺し貫かれた。

痛いところを、これ以上ないほど正確に射抜かれた衝撃に、呼吸がぴたりと止まる。

そうだ。俺は恐れていた。

数多の修羅場を潜り抜けてきた知略も誇りも、この無力な肉体という絶対的な現実の前にはただの慰めに過ぎない。

もし本気で大陸中の古文書を漁り、奇跡を追い求めた果てに「二度と戻らない」という確定的な宣告を突きつけられたら？

その時、俺の魂の芯に残された男の矜持は、完全に圧し折られて死んでしまうのではないか。

だからこそ、「小娘の身体も悪くない」「アルマという居心地の良さに流されるのも一興だ」と、もっともらしい言い訳の防壁を張り巡らせ、最初から諦めたふりをして自分を守っていた。

「……戻りたいに、決まってるんだろ」

喉の奥から絞り出すように漏れ出たのは、かすれた慟哭だった。

「こんな……大人の男に腕一本で組み伏せられるような、非力な身体……ちよっと胸の先をつままれただけで腰が砕けて、甘ったるい嬌声を張り上げちまうような、呪われた器……っ！　愛着なんて、あるわけねえだろうが……っ！」

溢れ出しそうになる熱いものを、奥歯を噛み締めて必死に押し留める。かつて剛弓を引き絞っていた右手を強く握りしめ、爪が手のひらに食い込む痛みに縋りながら、俺は男の魂の最後の叫びを目の前の相棒へとぶつけ返した。

「弓一本、満足に引けねえんだぞ……っ！　……だけどよ、アルマ。もし俺が男に戻ったら……お前はどうすんだよ」

口にしてから、猛烈な羞恥が全身を焼き尽くした。

まるで、庇護者を失うことを怯える、ただの年端もいかない小娘の台詞ではないか。

男としての自尊心が粉々に砕け散り、耳の先まで真っ赤に染め上げて顔

を背けようとする俺を、だが、アルマは逃がさなかった。

アルマの口元が、ふっと柔らかく綻んだ。

冷徹だった琥珀色の瞳に、春の陽光のような、どこまでも深い優しさが宿る。

「何を変な心配をしているんだ。そんなことは戻る方法が見つかったからでいい。そうだな……まあもしお前が男に戻ったら、今のように抱きしめて、手ずから可愛がることは難しくなるかもしれないな」

「……最後の一言が余計なんだよ、筋肉バカ」

掠れた声で毒づいた俺の背中を、アルマの大きな掌が、ぽんと力強く叩いた。

迷いと自己欺瞞を綺麗さっぱり吹き飛ばすような、あまりにもあっけらかんとした、絶対の肯定。

胸の奥底で燦り続けていた灰の中から、小さな、だが決して消えることのない火種が、パチリと音を立てて爆ぜた気がした。

「……探すただけだぞ。手掛かりが何もなけりや、即刻打ち切りだから」
自分に言い訳をするように吐き捨てながら、俺の脳裏には、ある妖艶な
女の横顔がくつきりと浮かび上がっていた。

帝国の暗部や各国の闇市場にまで届く、太いコネクション。
そう嘯いて怪しげなギルドコードを残していった、あの元娼婦の顔が。

弱小ギルドの埃っぽい窓口へ羊皮紙のコードを突きつけてから、丸三日。
宿屋の一室に届けられた木箱を開けた瞬間、俺は思わず顔をしかめて奥
歯を噛み締めた。

紫のベルベットのの上に鎮座していたのは、仄かに青白い魔力を帯びた小
ぶりの水晶玉だった。

それを見つめた瞬間、最悪の屈辱が鮮烈な熱を伴って脳裏に蘇る。

「……どうした、レナリア。随分と苦い顔をしているが」

背後から覗き込んできたアルマが、不思議そうに琥珀色の瞳を瞬かせる。

「……あの歓楽街の別棟で、玩具で散々弄ばれて、白目を剥いていき狂った俺の顔を壁一面に中継されたことを思い出したんだよ」

「ああ、あれか。涙と涎で顔を濡らしながら、お前が『ごめんなしやい』と可愛らしく啼いていた時の映像だな」

「蒸し返すな筋肉バカ！ 頼むから……死んでも思い出さなくねえんだよ！」

羞恥で耳までカッと熱くなるのを強引に深呼吸でねじ伏せ、俺は水晶玉へ指先を触れ、魔力を注ぎ込んだ。

キンと澄んだ共鳴音が室内に響き、球体の中心に淡い燐光が渦を巻く。

『はい、連絡どうも。カミラよー。子猫ちゃん、元気にしてたかしら？』

水晶の向こう側に現れたのは、淡い藤色の薄絹ドレスを纏い、細い煙管を指先に挟んだ妖艶な美女、カミラだった。

気だるげに組まれた細い脚のスリットから覗く白い太ももと、胸元の深い谷間は相変わらず男の目を引く毒々しい引力を放っている。

だが、俺の背後からぬつと現れたアルマの姿が映り込んだ瞬間、カミラの涼しげな眉がピクリと跳ね上がり、煙管を持つ指先が目に見えて硬直した。

「久しぶりだな、雌狐」

アルマが至極平然と低音で告げる。

『ひッ……!? あ、アルマ様も……ご、ごきげんよう……』

引き攣りきった笑みを浮かべ、喉を鳴らすカミラ。かつて床に組み伏せられ、大衆の前で徹底的に啼かされた怪物の威圧感、いまだにこの女の骨の髄まで染み付いているらしい。

「……おいおい、自慢の営業スマイルはどうしたんだよ、カミラ」

俺が皮肉交じりに口角を吊り上げると、カミラは引きつった笑みのまま、煙管を灰皿へトントンと押し当てた。

『……昼間から悪夢の再現を見せられる義理はないわよ。何の用かしら、規格外の番犬様と……その、すっかり飼い慣らされた可愛い子猫ちゃん？』

「調査を依頼したい」

俺はくだらない軽口を切り捨て、テーブルに手について本題を切り出した。

『ふふっ。あなたのことだからもう二度と私なんて頼らないと思っていたけれど……いいわよ。それで？ 何を調べさせたいの？ どこぞの商人の隠し財産？ それともダンジョンの抜け道かしら』

「……人体の、変異についてだ」

水晶の向こう側で、ふっと紫煙の揺らぎが止まる。

「肉体の構造を根底から作り替えるような強力な呪縛や、古代の秘術……それを『解除』し、元の状態へと巻き戻す手段についての情報が欲しい」
静寂が落ちた。

カミラは煙管を咥えたまま微動だにせず、切れ長の鋭い瞳で水晶越しに

俺の華奢な輪郭を品定めするように舐め回した。

やがて、紫色の煙を細く吐き出すと、冷淡な笑みを浮かべて首を横に振った。

『……却下ね』

「あ？」

『そんなふわふわした曖昧な依頼、うちが受けるわけないでしょう？ 古代の呪縛なんて星の数ほどあるのよ。何がどう作用して、どういう経緯で変異したのかも分からないのに、世界中の遺跡や秘泉を洗えだなんて……うちの情報網を何だと思っているのかしら？』

「金なら払う。前金だってきつちり——」

『お金の問題じゃないわよ、子猫ちゃん』

カミラは煙管の吸い口を俺に向け、冷酷に目を細めた。

『依頼の「理由」を言いなさい。誰が、何のためにその情報を欲しがっているの？ ……それを隠したまま、私を都合よく使おうだなんて、裏稼業

を舐めすぎよ』

「っ……それは……」

言葉が喉に張り付く。

元は男のハンターで、仲間に刺されて呪いの泉に落とされた結果、こんな貧相な小娘に作り替えられた。そんな荒唐無稽な真実を、この海千山千の雌狐に明かせば、どんな弱みとして握られるか分かったものではない。

『言えないのかしら？ ……なら、この話はおしまいね』

カミラが通信を切ろうと、水晶から手を離しかけた。

背を向けられれば、手掛かりへの糸口が完全に途絶えてしまう。

「……待てよ、カミラ」

俺は深くため息を吐き出すと、被っていた上着のフードを乱暴に脱ぎ捨てた。横からアルマが心配そうに視線を寄越してくるが、俺は片手でそれを制し、水晶を真っ直ぐに見据えた。

「……理由を言えば、本気で動いてくれるんだな？」

『話の信憑性によるわね。私が納得できるだけの筋が通っていれば、ね』
「……変異させられた当事者は、俺だ」

『……は？』

「俺は元々男だ。Sランクハンターのレナリアだ。ダンジョンの最深部で仲間に背中から刺され、変異の泉に落とされて……目覚めたら、こんな貧乳の小娘に作り替えられてたんだよ」

しん、と静まり返る室内。

カミラはぽかんと唇を開けたまま、数秒間、完全に硬直していた。

そして次の瞬間、抱腹絶倒と言わんばかりに肩を激しく揺らして吹き出した。

『あははははっ！ 子猫ちゃん、妄想は自慰のときだけにしておきなさい！』

「あァ!？」

『Sランクハンター「最速の神射手」レナリアの噂くらい、裏社会の人間

なら誰だって知っているわよ！　でもあの人はもう死んだでしょう？
迷宮の底で名誉の戦死を遂げたはずよ。あなたの名前を最初に聞いた時、
同じ名前なのは不憫ね、と思っただけだよ』

カミラは涙袋を拭いながら、侮蔑の混じった嘲笑を浴びせてくる。

『いくら依頼を引き受けてほしいからって、そんなハッタリで私を誤魔化
そうとするなんて！　笑えなさ過ぎて逆に笑っちゃうわよ』

隣でアルマが「雌狐……レナリアを愚弄するか」と大剣の柄に手をかけ、
怒気とともに身を乗り出した。

だが、俺はその腕を制した。

感情的に怒鳴り散らしたところで、この狡猾な女は納得しない。事実で、
この女の分厚い疑念の壁を一枚ずつ解体してやるまでだ。

「レナリアについて、随分と詳しそうだな、カミラ」

『当然よ。私が裏稼業に入る前から、ずっと憧れていた本物の英雄なんだ
からね。知ってる？　東部戦線で巨大飛竜の群れを単独で迎え撃ったあの

伝説を』

「ああ、あれか。公の記録じゃ『風向きを読んで急所を連続で射抜いた』ことになってるが、実際は違う。奴らは群れの先頭にいる雌のフェロモンに惹かれて飛んでたんだ。だから俺は、最初に撃ち落とした雌の生殖巣を矢じりに塗りたくって、岩壁の窪みに撃ち込んだ。勝手に群れが密集して激突したところを、毒矢でまとめて仕留めたただけだよ」

カミラの口元から、笑みがふつと消えた。

『な……何よそれ。そんな裏話、ギルド日誌のどこにも……』

「あと、王都の貴族街で起きた魔導暴走事件の時もそうだ。俺が『神技の三連射で魔導核を砕いた』とチャホヤされたが、あれもハッタリだ。核に張られた防壁が硬すぎて俺の矢じゃ通らねえから、三本目の矢の先端に、王室御用達の工房からくすねてきたオリハルコンの錐を括り付けて強引にこじ開けたんだよ。おかげで後から莫大な賠償金を請求されそうになって、ギルドの上層部と三日三晩揉めた」

『あ、あなた……どうして、そんなことまで知ってるの……!?』

カミラの細い眉が激しく波打ち、額に冷たい汗が滲み始める。

「言っただろ。俺が当事者だからだ」

『う、嘘よ！ 関係者から聞きかじった情報かもしれないじゃない！ いや、じゃあ……もつとマニアックな事実を言いなさいよ！ レナリア様の……男だった頃の、その……だ、男性器のサイズはいくつだったのよ!?』
思わぬ角度から飛んできた生々しい質問に、俺のこめかみがピクリと引き攣った。

男としての古傷。ダンジョンの底で裏切り者どもを女体化させた際、己の情けない器をアルマの前で思い知らされた、あの耐え難い屈辱が脳裏をよぎる。

「……十センチだ」

苦々しく吐き捨てると、俺は冷ややかな目をカミラに向けた。

「お前……憧れの英雄のそんなみつともねえ極秘事項まで把握してんな

ら、相当に興味が悪いぞ」

すると、その横で。

アルマが至極真面目な顔のまま、親指と人差し指をずっと広げて長さを測り始めた。

「……おい、アルマ。確認するな」

「……十センチというと、これくらいか？　なるほど、確かに小柄なレナにぴったりのサイズだな」

「うるせえよバカ!!　真顔で検証すんじゃないえ!!」

俺の渾身の怒声が響き渡る中、水晶の向こうでカミラが悔しげに唇を噛み、さらに食い下がってきた。

『くっ……ま、まだよ!　そんなの当てずっぽうかもしれないじゃない!　じゃあレナリア様が自慰をするときのオカズは!?　さすがにそれだけは分からないでしょう!?!』

「……っ」

俺の顔が、怒りとは別の羞恥で一氣に沸騰しかけた。何を電波に乗せて叫ばせやがるんだこの雌狐は。だが、ここで引けば認めたことにならない。男の意地を総動員して、俺は吐き捨てるように言い放った。

「……巨乳ものだ。修道服を着た……な」

空氣が凍りついた。

直後、隣にいたアルマが、なぜか居心地悪そうに腕を組み、自らの豊かな胸元を隠すように身を引いた。

「ち、ちげえぞアルマ！ 別に俺はそんな……いや、まあ全然違うわけじゃないんだが……！」

必死に取り繕う俺に対し、アルマは心底氣の毒そうな、深い慈愛と哀憐の混ざった目を向けてきた。

「それじゃあ……残念だったな、レナリア。女にはなれたのに巨乳にはなれなくて」

「おい、憐れみの目を向けるな!!」

男の尊厳をズタズタに削り取られて叫ぶ俺の前で、水晶越しのカミラはわなわなと肩を震わせていた。核心を突かれたファンの動揺そのものである。

『じゃ、じゃあ……レナリア様が自慰をする時の手は、右かしら、それとも……!』

「左だッ!!」

食い気味に吼え返すと、俺は水晶の魔導具を指差して絶叫した。

「つーか、俺はお前の情報網の方が恐ろしいわ!! なんでオナニーの利き手まで把握してんだよ! そんなことまで調べなくていいだろ変態情報屋アッ!!」

水晶の向こうでガタタッ、と派手な音が鳴り響き、カミラが椅子から転げ落ちていた。

『し、失礼いたしましたああッ!! レナリア様!! このカミラ、大変なご無礼を……ッ!!』

画面の向こうで、あの高慢だった娼婦が、見事な勢いで机に額を擦り付けて平伏していた。

露出した胸元が机に潰れるのも気に留めず、ペコペコと狂ったように平謝りを繰り返す。

「いや……信じてもらえたのは助かるがよ」

俺は額を押さえ、心底疲れ果てた息を吐き出した。

「決め手がモノのサイズと性癖っていうのが、男として死ぬほど哀しいんだがな……」

『ご存命でいらしたのですね、レナリア様……ッ！ あのような浅ましい裏切りに遭い、命を落とされたのかと、私、ずっと心を痛めておりましたのに……！』

「カミラ、その話し方はやめろ。今の俺はみたとおり、ただの無力な小娘で、お前の言う『子猫ちゃん』だ。今まで通りでいい」

『しかし、憧れの神射手様にそのような無礼は……』

「いいから戻せ……それより依頼、引き受けてくれるんだな？」

俺が鋭く睨み据えると、カミラはハツとしたように顔を上げ、かつての筆頭娼婦らしい笑みを、今度はどこか本気の熱を帯びた瞳で浮かび上がらせた。

『もちろんです！ ……じゃなくて、もちろんよ。その話、うちの裏ルートを総動員して、本気で乗ってあげるわ』

「頼んだぜ。期待してる」

『ええ、任せなさいな……あなたを男に戻すための極上の手掛かり、必ず見つけ出してあげるわ』

通信が切れ、静寂を取り戻した部屋の中で、俺は握りしめた拳をゆつくりと開いた。横でアルマが、どこか誇らしげに、けれど少しだけ寂しそうに俺の横顔を見つめている。

男に戻るための歯車が、いま、確かに動き出した。

それから四日後の夜。

机上の水晶玉がキンと澄んだ共鳴音を立て、淡い燐光とともに転送用の魔方陣を描き出した。

光が収まったあと、木製テーブルの上に滑り落ちてきたのは、皮で装丁された重厚な羊皮紙の巻物だった。

俺は息をひそめ、震えそうになる細い指先で革紐を解く。

広げられた紙面には、複雑に入り組んだ水路網と、旧文明の幾何学模様が混ざり合う精密な地図が描かれている。

『見つかったわよ。あなたの探している、奇跡の場所がね』

水晶の奥から、紫煙をくゆらせたカミラの艶めかしい声が静かに響いた。『水上都市「ヴェネ・アスール」。外海へと突き出たその巨大な水路網の地下深く、旧文明の古代遺構が眠る水脈の最深部よ』

「水上都市……」

『ええ。文献によれば、そこにはあらゆる肉体の変異や呪縛を根底から洗い流し、初期状態へと巻き戻す「原初の水瓶」と呼ばれる古代祭壇が存在するわ。うちの裏ルートでの検証を含めて、情報の確度は八割以上ね』
八割。

裏社会の怪しげな情報屋どもが吐き出す戯言とは次元の違う、極めて現実的で破格の数字だ。

本当に、あるのだ。

俺の骨格を縮め、筋力を奪い、こんな小娘の身体へと縛り付けている忌まわしい呪縛を、根こそぎ解き放つ手段が。

ドクン、と胸の奥で心臓が早鐘を打った。

かつて剛弓を引き絞り、千歩先の獲物を支配していた全盛期の男としての輪郭が、目の前で急速に現実味を帯びていく。

『ただし……一筋縄じゃないわよ、子猫ちゃん』

カミラは煙管の吸い口でトントンと机を叩き、真紅の唇を吊り上げた。
『残念ながら現地では大規模な組織が、その水門一帯の利権をがちり握っているの。しかもね……その組織に関わった連中は忽然と姿を消すか、あるいは意志を根こそぎ抜かれた操り人形のようにになってしまふ、みたいな物騒な噂が絶えないわ』

「操り人形、ねえ……」

『ふふ、そうよ。裏でどんなエグい術式や薬を使っているかも分からない、得体の知れない連中の巣窟よ。腕っぷし自慢のゴロツキですら自我を抜かれてしまうような場所で、そんな小さくて無防備な小娘の身体じゃ……あつという間に捕まって、好き放題に弄ばれるお人形さんにされちゃうかもしれないわねえ』

挑発するように目を細めるカミラに対し、俺は不敵に口角を吊り上げてみせた。

「上等だ。どんな罠だろうと、踏み越えてやるさ……男の魂を舐めるなよ」

『ふふっ、その威勢の良さ、嫌いじゃないわ。吉報を待ってるわよ、元・

S ランクハンター様』

通信が途切れ、室内は再び静まり返った。

ランプの油が爆ぜる小さなパチパチという音だけが残り続ける。

羊皮紙を握りしめる指先に、じわりと汗が滲んでいた。

男に戻る。

大弓をもう一度背負い、誰にも屈しない自分を取り戻せる。

その熱狂が全身の血を沸き立たせる一方で、ふと、胸の奥に冷たい影が落ちた。男に戻るということは、何を意味するのか。

今のように、アルマに頭を撫でられ、抱き上げられ、呆れるほど真っ直ぐな温もりに包まれる日々の終わりを告げることではないのか。

「……ヴェネ・アスールか」

背後から、低く落ち着いた声が落ちてきた。

振り返ると、アルマが大剣を壁に立てかけたまま、腕を組んで羊皮紙を

見つめていた。

その琥珀色の瞳は静かで、澄み切っていて、どこか遠い場所を見つめるような哀愁を孕んでいた。

「本当にあるのだな。お前が、男に戻る手立てが」

「……ああ。あの女の裏取りだ。確度は高そうだ」

「そうか……よかったな、レナリア」

アルマはふつと口元を緩め、微笑んだ。

一点の濁りもない、相棒としての祝福の笑み。

だが、その笑顔の底に微かに揺れた寂しげな陰りを、俺の目は見逃さなかった。

「……何がよかった、だ」

俺は羊皮紙を無造作に机へ放り出し、悪態をつくように視線を逸らした。「行ってみなきゃ分からねえし、怪しげな組織相手にするのだって一苦劳だ。それに、その『原初の水瓶』とやらが本当に俺の身体に効くかどうか

も五分五分だからな」

「それでも、手掛かりゼロだった頃に比べれば大きな前進だ。お前が望んでいた、元の姿に戻るかもしれないのだからな」

アルマはゆっくりと歩み寄り、俺の前に腰を落として視線の高さを合わせた。

剣ダコのある硬く大きな手が、俺の華奢な頬へとそっと添えられる。

触れられた瞬間、小娘の過敏な肌がトクンと跳ね、下腹部の奥に微かな熱が走ってしまう。

「……アルマ」

「お前のその小さな手も、華奢な肩も……こうして私の胸の中にすっぽりと収まってしまう体軀も、私にとってはたまらなく愛おしいがな」

耳元へ落ちてくる、低く艶めかしい呼気。

アルマの指先が首筋を伝い、シャツの襟元から滑り込んで、未発達な鎖骨の窪みを優しくなぞる。

それだけの接触なのに、俺の身体は意に反して甘い痺れを覚え、喉の奥から情けない鼻声が漏れそうになる。

「だが、お前が失った誇りを取り戻したいと願うのなら、私はそのすべてを肯定しよう」

「……嘘つけ」

俺はアルマの手首を掴み、睨みつけた。強がりで武装しながらも、瞳の奥が熱く揺らぐのを止められない。

「男に戻ったら、今みたいに抱きしめたり可愛がったりできなくなるって、前に自分で言っただろうが」

「言ったな。だからこそ、今のうちに、この身体を骨の髄まで記憶に焼き付けておかねければならないな」

「は……？　おい、待て、何を——」

抗議の言葉を紡ぐ暇もなく、アルマの腕が俺の腰を強引に引き寄せた。ふわりと身体が浮き上がり、そのままベッドの分厚いマットレスの上へ

と押し倒される。

覆いかぶさってくる、銀髪の女剣士のずっしりとした重みと、圧倒的な体温。

「アルマ……ッ！ 夜明け前には港へ向かうんだろうが！ こんな時に——」

「……港へ出る前の、ほんのわずかな儀式だ」

薄い布地越しに、尖りきっていた胸の先端を、アルマの体温の高い指の腹でキュッと挟み込まれた。

「ひゃうんッ……!？」

背筋を突き抜ける電撃的な快感。

男の理性が叫んでいるのに、この肉体はアルマの指先ひとつで歓喜の蜜を滲ませ、熱狂の波に呑み込まれていく。

「ほら……口では焦っているのに、身体はこんなにも素直に熱くなって、私を求めているぞ。……名残惜しいのは、お前の方ではないのか？ レナ

リア」

「う、うるせえ……っ！ 誰が、お前なんか……っ、あんッ！」

「強情な唇だな。……だが、その減らず口も、あと少しで甘い悲鳴に変わる」

アルマの唇が俺のうなじへと落とされ、熱い舌先が耳の裏を濡らしながら、もう片方の手が下着の隙間へと容赦なく滑り込んでいく。

狭小な秘所の奥底、もっとも過敏な芯を捉えられ、逃げ場のないリズムで捏ね繰り回されるたび、男の矜持がガラガラと音を立てて崩れそうになる。

悔しい。情けない。

だけど、この肌に触れるアルマの体温が、指先の無骨な優しさが、今はどうしようもなく愛おしくて、俺はシーツを握りしめながら、漏れ出そうになる嬌声を必死に噛み殺していた。

男に戻る前に、この身体が刻みつけてしまう最後の甘美な毒。

夜の帳のなか、潮風が吹き抜ける港町の一室で、俺たちは互いの存在を貪るように、深く、熱く、重なり合っていた。

そして、夜が明ける。

東の空が白み始めた頃、俺たちは宿の鍵を置き、静かに扉を開けた。冷涼な朝の海風が、まだ火照りの残る肌を撫でていく。

歩くたびに太ももの内側が擦れ、微かな痛痒感が昨夜の痴態を思い出させるが、俺はフード深く引き下げ、背中の短弓をぎゅっと握り直した。

港の栈橋には、水上都市『ヴェネ・アスール』へと向かう巨大な定期船が、黒い巨軀を揺らして錨を上げている。

「行くぞ、アルマ」

「ああ」

男に戻るための奇跡と、相棒との絆の終わりを賭けた、最後の旅が始まろうとしていた。